

特集

# 〇〇と友達になろう！—身近な動植物との 継続的なかわりを重視した体験的活動—

田中 敏久

東京都西東京市立柳沢小学校

Let's Make Friends with ~: Experience-Based Activities Focused on the Relationship with Familiar Animals and Plants

Toshihisa TANAKA

Yanagisawa Primary School, NishiTokyo City

## 1 はじめに

筆者は、1994年に東京都の区部の幼児、児童・生徒（1187名）を対象に＜自然体験の多様性や身近な生き物に対する意識・生活の実態＞に関する調査を行い、その結果を次の様に報告してきた。

- ①自然体験が豊かな子どもほど、さわったことのある生き物の種類も多く、自分から植物を育てたり生き物とかかわったりしようとする等、生き物に対する興味・関心が高く、これらを大切にしたいという意識をもっている。
- ②学校で教材として扱うことにより子ども達がかかわる体験が増えていると考えられる生き物があり、学校以外の生活の場において、そのような生き物とかかわる体験が少なくなっていると考えられるので、より多くの体験的活動ができるように、学校の中での活動の場や時間を設定していく必要がある。
- ③学習活動として体験的活動を設定する際には、子ども達が「自分が育てている、関わっている」という意識をもって生き物と接していけるよう配慮することが重要である。（「平成6年度 研究紀要 東京都杉並区立済美教育研究所」より抜粋）

則ち、私達は「自然体験が豊かな子ども程生き

物に対する興味・関心が高く、生き物を大切にしたいという意識をもち得るが、今日子ども達は日常生活の中で生き物とかかわる機会が少なくなっているため、生き物とかかわる体験的活動の場や時間を学校教育の中で設定していく必要があり、その際に、子ども達が＜自分が育てている・関わっている＞という意識をもって接していけるよう配慮することが重要」だと考えたのである。

そして、筆者は日本環境教育学会等の場を通じて、多くの教育関係者—筆者と同じ小学校教育のみならず、幼児教育から初等中等・高等教育まで—が、筆者と同様の思いを抱いていることに気づき、このことがあらゆる発達段階の子ども達に関わる重要な問題だと確信するに至った。

このことが、なぜ・どのように問題なのかは別の機会に譲りたいが、私達がなぜ「子ども達が＜自分が育てている・関わっている＞という意識」を持つことを重視したのかについて若干補足しておきたい。

私達は、＜自然体験の豊かさ＞ということと＜体験の多様性＞と＜かわりの深さ＞の2つの面から考えた。

そして、植物や小動物・昆虫等の＜身近な生き物を育てたり世話をしたりする＞等の継続的な体験は、ただ単にさわったり抱いたりするだけの一時的な体験よりは、その生き物との関わりがより深くなるはずだと考えた。

（問い合わせ先） 〒188-0002 東京都西東京市緑町2-20-16 田中 敏久  
E-mail DQM05545@nifty.com

つまり、ただ多くの種類の体験をしているというだけでなく、生き物を育てたり世話をしたりする体験のようなくより深いかかわりをするのが、＜体験の豊かさ＞にとって重要だと考えたのである。

私達の調査の結果にも、様々な植物を育てたことのある子ども程自然体験が豊かであることが表れていたのである。

本稿で以下に紹介する2つの事例は、このような考え方を背景にして筆者が行ったものであるが、いずれの活動も今日では多くの教育現場で類似の活動が広く行われており、このことも前述のような考えを裏付けるものとなっていると言えよう。

## 2 事例1 <木と友達～ぼくの木・わたしの木>

### 2.1 ねらい

・各自が決めた〔自分の木〕を中心とした身近な自然環境を通年観察し、その活動を通して、身近な環境に対する感受性を高めることができるようにする。

※子ども達は一年間かけてじっくりと、身近にある一本の木と様々な方法でかかわりながら、その活動を通して樹木を中心とした身近な環境の変化の様子に直に触れ、〔身近な環境〕に対する豊かで感性的なかかわりを体験をする。そのような多様な体験的活動を通して、子ども達が環境に対する豊かな感受性を育むことができるようにすることを意図しているのである。

### 2.2 準備する物・活動場所等

・ふれたりさわったりしながら年間を通して日常的・継続的に観察したり調べたりできる樹木とその周りの自然環境

- ・観察カード
- ・虫メガネ・聴診器等の補助的な観察用具

### 2.3 実施時期・時間等のめやす

・年間を通して、できるだけ多様な季節や時間帯に行うことが望ましい

- ・45分程度以上の活動を、月1回程度以上行う

ことが望ましい

## 2.4 活動の流れ

### 1) 〔自分の木〕を選ぶ

◎まず初めに、自分が年間を通して調べたりかわったりする〔自分の木〕を決める。

この時に考慮すべき条件として、次のようなことがある。

※望ましい〔自分の木〕の条件

- ①子ども達が、自力で一年間を通して観察等ができるような場所や環境か
- ②種類等はどのようなものでもよいが、枯れたり場所が変わったりしないか
- ③その木とのかかわりを通じて、周囲の他の植物や小動物等の生活の様子等にも触れることができるか

この時に、生活圏から若干足を伸ばすことも考えられるが、ここで大切なことは、その木がある場所が、子ども達にとって身近な場所かどうかということ（心理的・空間的に）。

この活動のねらいは前述の通りであり、上の様な条件を満たしていれば、どんな木でも構わないのである。むしろあまり大きな木で、子ども達が木の全体像を十分に把握できないような木や、近くまで寄れない様な木はよくない。

また、より重要なことは「自分の木を見つける（探す）過程そのものも、身近な環境の観察・調査の第一歩だということ。身近な環境に対して



写真1 友達の木を探す子ども達

〔あれども見えず〕になっている子ども達に、身近な樹木や生き物の存在、その不思議さ・すばらしさに気づかせるという点からしても、生活圏内の素材を取り上げる意義は大きいのである。

## 2) 観察カードに観察・記録する

◎〔自分の木〕を決めたら、次のような観点で五官を使ってよく観察する。この際に、〔観察カード〕等に記録を残すようにすることが大切である。

この記録はノート等でもよいが、後で掲示して互いに見合うことを考えるとカードが望ましい。また、この観察・記録の活動は繰り返して行ってほしい。そのことで、子ども達が互いの観察の仕方や表現の仕方等を学び合い、観察や表現が豊かで多様なものになっていくのである。

この時、子ども達に次のような視点や方法を例示すると効果的な場合もあるが、できれば最初は自発的な活動の様子を観察して、望ましい活動をしている子どもの例を紹介する等、例示の方法には配慮が必要である。

### ※観察の視点の例

- ①木全体の様子・樹形    ②幹の様子
- ③枝の様子    ④葉の様子    ⑤花や実等の様子
- (～以上、樹木自体について)
- ⑥その他、気がついたこと(他の木や周囲の様子、寄ってくる生き物等の様子等)

### ※観察の方法・手だて

- ①目でゆっくりよく見る
- ②手で触って手触りを調べる
- ③耳で音を聞く(木の幹・周囲の音)
- ④臭いをかいでみる(花・樹液等)
- ⑤道具を使う(虫メガネ、聴診器等)
- (ここでは、活動の趣旨からして、⑤よりも①～④のように自分の体で直接観察することが重要)

## 3) 自分の木ともっと仲良くなろう!

◎以上のようにして、様々な時期や季節に繰り返して観察したり調べたりする。

この時、大部分の子ども達は、繰り返して行っ

ていく中で観察の内容や方法等を工夫するようになり、それが記録にも現れるようになる。

その際に、カードの発表・掲示等のいわゆる表現活動が重要な意味を持つてくる。

先生があれこれ指示するよりも、遠回りのようでも友だちの発見やその表し方に注目させた方が、より確実に学び合う姿勢が育っていくのである。また、繰り返し行う時には、「前の時と比べて変化したことや新しい発見がないか、よく探してみよう」と問いかける等して、変化や成長に着目させることも大切である。

### ※観察の時期・季節の例

- ①春夏秋冬の季節毎に1～数回ずつ観察する。
- ②毎月1回(同じ日等に)観察する。
- ③晴れのと雨の日・曇りの日、雪の日(降雪後)・・・等の天候条件の異なる日に行く。(特に、周囲の状態や生き物の様子等をよく観察させる)

## 3 事例2 <ヤゴと友達になろう!>

### 3.1 ねらい

・理科の学習の発展として身近な校内のプールや池の生き物の世界に目を向け、身近な所にも生き物の世界が豊かに広がっていることに気付くとともに、ペットボトルを利用する等の工夫をして、プールから採集したヤゴを羽化するまで育てたり羽化の様子を目の当たりにしたりすることで、生き物の成長の様子や生育にふさわしい環境条件について実感を伴って理解を深めることができるようにする。

※この活動では、子ども達にとってなじみの深い学校のプールが、実は多くの生き物の住みかだったことに気づくことができる。つまり、自分達の身近な環境が、思っていた以外にもいろいろな意味や役割があることや身近な所にも、よく探せば意外に豊かな生き物の世界を発見できること等の〈身近な環境の意味・役割〉を実感を伴って気づくことができるようにすることを大切にしたい。

・また、ペットボトル等を使うことで、教室や家庭等子ども達の身近な場所でヤゴの世話をさせることができ、〈身近な生き物との直接体験〉を一

人一人の子どもに経験させることができる。

### 3.2 準備する物・活動場所等

- ・ヤゴの生態に関する資料（図鑑・文献・ビデオ・インターネット上の情報等）
- ・魚用の網・ザル・かご等のヤゴ採集用具
- ・トライ等の一時的なヤゴの入れ物
- ・ペットボトル
- ・要らなくなった衣装ケース・トロ箱等
- ・川砂、よく洗った砂等
- ・少量の黒土、荒木田上（田んぼの土）等
- ・水草
- ・ヤゴの餌（イトミミズ、生きたアカムシ等…釣具店で購入可能）

### 3.3 実施時期・時間等のめやす

・実施時期は、1学期、それもヤゴの成長時期があるので、（東京周辺ならば）5月末～6月始めがふさわしい。あまり早いとヤゴがまだ幼くて餌をあたえる期間が長くなりすぎて、結果的に羽化率が低くなる場合がある。

### 3.4 活動の流れ

1) ヤゴってどこでどんな生活をしているのかな？  
◎学校に飛んでくるトンボはどこで生まれ育っているのか、ビデオ等の資料を見る等して自分なりに考え、話し合う。

※子どもたち自身が日頃のトンボとのかかわり体験を想起できるように、言葉掛け等配慮する。  
○トンボの生活に詳しいトンボ博士に来ていただいて、お話を聞いたり、トンボクイズを考えたりして、トンボの生長の過程に興味をもつする。

※環境ボランティア・自然観察会等、地域の人材との連携・協働を工夫したい。

2) ヤゴが住みやすい家を工夫して作ろう！

◎ヤゴの家の設計図を書いたり、不要になったペットボトル等を使って自分なりに工夫したりしてヤゴの家（個人用飼育施設）を作り、土や水草等を入れる等してヤゴの生育環境を整える。

※家作りでは、カッターを使う等やや危険が伴う場合もあるので、図工の先生や保護者有志等の

TT体制（チームティーチング）で取り組みたい。

※ヤゴの生育にふさわしい土や水草等をさがす活動も、子どもたちの地域とのかかわり体験を充実させるという視点から配慮し、可能な限り実施したい。

3) <プールのヤゴ救出作戦>をしよう！

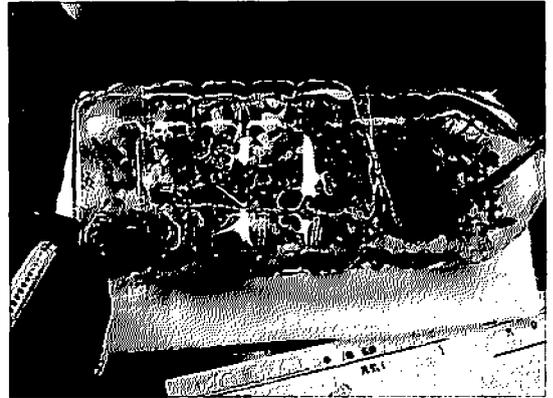


写真2 ペットボトルのヤゴの家

○プールにはどんな生き物がいるのか調べてみる。

※プランクトン等は陽当たりのいい隅の方に群生している場合が多いので、事前に下見をしておくとうい。

※プランクトンネットがあればベターだが、むしろ、子ども達に虫取り網を持ってこさせる等の意欲付けの配慮も必要。

◎「プールの掃除をして流されてしまう前に、みんながヤゴを助けてあげよう！」等と呼びかけて、<プールのヤゴ救出作戦>を行う。

※ヤゴはプールの底の落ち葉等の堆積物の中に隠れ住んでいる場合が多いので、それらをザル等ですくい上げてプールサイドのトライなどに一時的に入れ、葉をめくる等してさがすとよく見つかる場合もある。（餌の赤虫等も、その中にある場合が多い）

※プールに入れない子等にこの仕事を分担させてもよい。

4) ヤゴがトンボになるまで育てて、ヤゴと友達になろう

◎各自が作った家等を使って、ヤゴがトンボにな



写真3 羽化したギンヤンマと子ども達

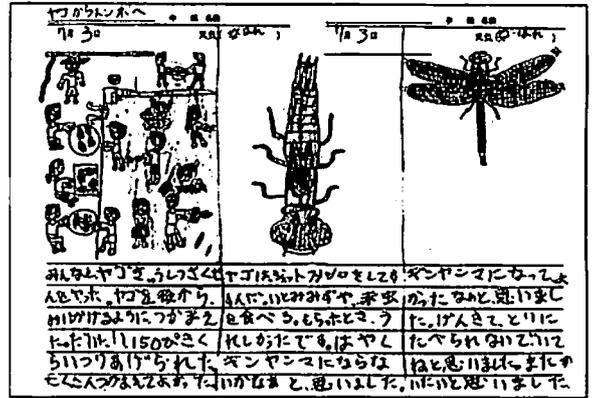


図1 子どもの書いたカード

るまで観察しながら世話をする。

※中学年程度の子ども達であれば、一般的には昆虫等を育てる活動を好む場合が多い。女子等の中に最初はこわがったりする子がいる場合もあるが、友達が平気で世話している場面を見る等している間に、ほとんどの子どもが一生懸命に世話をするようになり、ニックネームをつける等して非常に親しみをもつようになる場合が多い。

※指導者も日頃からヤゴの状態に気を配って、水や餌の補給などに子ども達の注意を向けさせたり、「そろそろ羽化するかもしれないね」等の言葉かけを心がける。

※朝登校時に教室の窓やカーテン等に、羽化直後の未成熟の成虫が付いている場合等も多いので、時期になったら子どもたちの注意を喚起しておくよ。

※羽化後十分に時間が経って飛べるようになったら「○○ちゃんに、みんなでサヨナラしようね」等と呼びかけて全員で見送る等の配慮があるとよい。

#### 4 おわりに

本稿で紹介した事例は、例えば事例2で、プールの生物の調査・観察よりはむしろ救出したヤゴを育てることに重点が置かれている等、「身近な動植物と子ども達との継続的なかかわりを重視した体験的活動」が中心となっている。

そのような活動を行っていく時に様々なむずかしさや課題があることも事実だが、冒頭に述べたような子ども達の実態は国内の多くの地域でも同様だと考えられ、また、子ども達や学校を取り巻く今日的な状況（例えば、学力を巡るマスコミ報道等）を考えると、学校における体験的活動や身近な動植物との継続的なかかわりの重要性はますます高まっていると思われる。

本稿は内容的にも極めて不十分なものだと自覚しているつもりだが、そのような状況に対する本学会関係者各位の議論を始める一つのたたき台が必要と考え、ここに掲載することをお許し願いたいと思う。議論彷彿を願いつつ。